



ミミとサンタク ローズ

たなかいっけい

ミミとサンタクロース

かけぶとんを、ガバっとはねのけてミミはおきあがりました。

「そうよ、サンタさんにプレゼントをあげなくっちゃ」

ミミはふとんの中でふっと、まいねんクリスマスになるとサンタさんはプレゼントをもってきてくれるのだけど、ミミはいままで、サンタにプレゼントをしたことがないことを思いだしたのです。

「サンタさんへプレゼントはなにがいいかしらねえ」

くらい部屋にカーテンのすきまから月の光がさしていました。ミミはベッドからおきだして窓から夜空をみあげました。

「そうだわ、お手紙でなにがほしいか聞いてみればいいのよ」

サンタクロースさま

まいねんクリスマスプレゼントを、ありがとう。

ことは、おれいにわたしからプレゼントをしたいのですが、なにがいいかわかりません、サンタさんのほしいものはなんですか、おしえてください。

ミミより

「さて、このお手紙はゆうびんポストへいれてくればいいわね」

ミミはさっそく家のちかくにあるポストに手紙をいれました。

つぎの日のお昼のことでした。ミミが家のまえであそんでいると、オートバイにのった、ゆうびんやさんがやってきて「やあ、ミミちゃんだね、このお手紙だけあて名が、かいてないからとどけられないんだよ」そう言いながら、サンタに出したミミの手紙をてわたしました。

「ちゃんと、あてさきの住所をかいて出してね」ゆうびんやさんは、そういうとオートバイにのって帰っていきました。

夜、かえされた手紙をつくえのうえにおいたミミは、ベッドにはいって、つぶやきました。

「こまったわねえ。サンタさんの住所って、だれにきけばわかるのかしらねえ」

時計が十二時をうちました。ミミは眠れずにカーテンのすきまから、さしこむ月のひかりをみていました。カーテンがゆれて、つめたい空気がはいつてきて、そっと窓がしまりました。ミミは目をこらして窓のほうをみつめました。窓の下に、ちいさな人のかたちが、かげぼうしのように見えました。ミミはおどろいて、もうすこしで、声をあげそうになりましたが、ここはグツとがまんして、気づかれぬように、ねたふりをしていました。

ちいさな人は、つくえのうえによじのぼると、ミミの手紙を手にとって、かついでい

た白い布の袋にいれました。じっとしていることに、がまんできなくなったミミは、かけぶとんをガバツとはねのけると

「ねえ、ねえ、小人さん、あなたはサンタさんのおてつだいをしているの」と聞きました。とつぜんのことに、あわてて、つくえからおちそうになった、ちいさなひとは、はらばいになりながら

「え、わあー、ああびっくりしたなあ。いつから見てたのさ」

「あなたが窓からはいつてきてから、ずっとみてたわ」

「どうして、どうして、ちゃんと眠っているとおもったのに」

「ごんねんでした。たぬきねいりをしてたのよ」

「なあんだ。こまったなあ。ときどきこういう子供がいるんだよな」

「ねっ、ねっ、サンタさんに、わたしの手紙のへんじをきいてきてくれる」

「手紙をわたすことはできるけど、へんじをきいてくるってわけにはいかないよ。つぎにくるのはクリスマスイブの夜だし、ぼくがこの家にくるかどうかサンタさんしだいだからなあ」

「ああら、それじゃあ、これからあなたといっしょにサンタさんのところへいこうと、おもうけど、つれていつてくれる」

「そんなことできないよ、むりむり、サンタさんにしかられちゃうよ」

「そんなこといわないで、まっててよ」

そんなことを言っているうちに、窓のそとにサンタのそりがとまって、しぜんに窓があきました。つめたい空気がへやの中へたくさんはいつてきました。

「ほっ、ほっ、ほー、ミミちゃんごきげんよう」

ほんもののサンタクロースがそりにのっていました。ミミはびっくりして、まんまるの目でサンタをみつめました。

「わー、サンタさんだ。あいたかったわ、わたし、お手紙をかいたの、いつもプレゼントをもらっているから、ことしはわたしからサンタさんにプレゼントをしようとおもったんだけど、なにがいいかわからなくて・・・」

「ありがとう、ミミちゃん。そういうやさしい気持ちが最高のプレゼントだよ」

いつのまにか、袋をせおった小人は、そりにのっていました。

「その、やさしいきもちを、みんなにプレゼントしてやってね」

そう言いながら、サンタはミミにウインクをして、トナカイからのびている、たづなをひとふりして

「ほっ、ほっ、ほー、さあひっぱれー」

サンタのそりは、いつのまにか窓をはなれ、おおきく円をえがきながら上がっていき、やがてキラッと光って消えてしまいました。

クリスマスの日、ミミは家族みんなで町の教会へいきました。牧師さんのおはなしがおわって教会を出てきたときでした。ミミはふかぶかと毛糸のぼうしをかぶった大きな

男の人とすれちがいました。

「メリークリスマス、ミミちゃん、やさしいプレゼントをありがとう」

ミミは目をぱちくり、聞いたことのある声でした。

「あっ、サンタさんだ」

ふりむいたとき男の人は、教会のおくに消えていました。

「ミミ、なにしてるの、おいてっちやうわよ」

教会のそとで、ママがさげんでいました。

「まって」

ミミはそう言うと、笑顔で、かけだしました。

おわり